ボフム大学ミュージアム
——対峙する古典古代と現代——

物　部　晃　二

ドイツのルール地方といえば、日本の小学生でも知っている、世界有数の工業地帯である。その鉄と火と煙というイメージにはすぐに結びつかない、広い空の下、牧歌的な丘陵の地に、ボフム大学（Die Ruhr-Universität Bochum）の学棟が林立している。縦横、規則正しく配置され、方形で、同じ高さと大きさの、巨大なコンクリート建築群である。大学のミュージアム（Die RUB-Kunstsammlungen）は、この建築群を二分してひらけるフォーラムの一方に、円形の音楽ホールと向き合うかたちで建てられている。

十年近く前、この地での滞在を始めたばかりのある日、キャンパスを緊張気味にうろついていると、予期することなく、〈動く彫刻〉（1970、Y. Agam 作）が、黙々と姿を変えているのに出合った。そこが、ミュージアムの前庭であることに、その時しばらくの間、気がつかなかった。右手には、錆色を呈した鉄の作品（1972／73-5、J. Reineking 作）が、さりげなく床に置かれていた。大きなガラス越しに中を見透すと、〈ラオコーン〉の復元群像が見え、その傍らで、円形に敷かれた砂の上を、同心円の波紋を描いて、竿のようなものが熱心に回転していた（1968年、G. Uecker 作）。眺めていると、遙かな過去から、ずっとそのように回転しているように思われた。そのあたりに佇んでいると、未だ初見の挨拶を済ませていないイムダール教授（Prof. Dr. Max Imdahl）の面影と人柄に、はからずも前もって接している気持ちがして、少し心が安らいでくるのを感じたのを、今でも思い起こすことがある。

写真（A）
『Dierichs コレクションの解説図録、1979』のカバー表紙。左：アリストテレス像（アレクサンダー大王がつくらせ、師に捧げた頭像の、ローマ帝政時代のコピーのひとつ）　右：1969、R. Serra の作品。

このイムダール先生に率いられて、バロックの建築家、Fischer von Erlach をテーマにウイーンへ、現代美術をテーマにオランダの Kröller-Müller 美術館へ、と方々の、美術史及び藝術理論の実地演習に同行したが、新学期の最初の時間は、大学のこのミュージアムで行われた。

ここには、古代ギリシア・ローマの作品を主として、西欧文明の起源に遡る作品と、今世紀の20年代から今日に至る現代藝術——ほとんどすべて非具象の作品で、蒐集者の確かな評価の眼が感じられる——が、展示されている。時代的にかけ離れた、ヨーロッパ美術の二つの極の作品群が、緊張をはらんで対峙する、ユニークな美術・博物館である。

われわれは、たとえば、Jan J. Schoonhoven の手になる白い格子状の幾何学的レリーフ（1974）や、N. Kricke の球状の空間造形（1978）の前に立ったあとで、ミケーネの壺の単純で流麗な線を眺め、ギリシアの、幾何学的な模様の壺や黒絵式の壺が並ぶ部屋から部屋をめぐり、肖像彫刻の陳列室で、アリストテレスやアグリッパの大理石像に対面することになるのである。さらに、現代に立ち戻り、J. Albers の方形からなる抽象絵画や、A. Giacometti のブロンズ男子像の前にいることもあろう。そして、隔たる時代を往還して、その間をさまざまな思いと問いで埋めることもできるのである。

「皆さんは、こんなに新しい大学に、このようなミュージアムが在ることに、きっと驚かれることでしょう。ボフムは、これで、他の大学と肩をならべて、自分たちのミュージアムを持つことができたのです」と、列品解説のパンフ

写真（B）
ミュージアム内部から前庭をのぞむ。手前は、1974、G. Spagnulo の作品。ガラス越しに、1970、Y. Agam の作品が見える。

レットの冒頭に書かれている。続けて述べられているように、あらかじめ熟慮された構想のもとに、今みるような「他に類をみない」新鮮なコンセプトのミュージアムが出来たのではない。60年代半ばに創立されたこの大学に、当然のように美術・博物館設立の計画が持ちあがると、ボフムにゆかりの多くの人々の蒐集品がこの大学に寄贈されたのである。

こうして、1975年開館したミュージアムの中核となったのは、いくつかのコレクションから、まとまったかたちで寄せられた、次のような作品群である。 (1) 古典古代を主とする、壺など、601点 (2) 古代ランプ、408点 (3) 古代コイン、2828点 (4) コレクターから寄せられたものと、美術史学科蒐集による現代の作品 (5)〈ラオコーン〉等、考古学科蒐集による復元ブロンズ像

その後、このミュージアムのコンセプトを明瞭に印象づけることになった、古典古代の貴重な大理石肖像彫刻、8点と、N. Carrino、T. Lenk、G. Spagnulo、G. Rickey、F. Stella 等、現代の立体作品とを合わせもつ、Dierichs 氏のコレクションが寄贈されると、1981年、展示室が拡張されて、今日に至っている。

〈古典古代と現代の対峙〉というコンセプトからなる新たなミュージアムは、だから、はからずして出来あがったのである。しかし、古典古代考古学の分野で名高い、ボフム大学の考古学科と、最先端の現代美術に対しても、比類のない理解と確乎とした知見を示されたイムダール教授の存在のことを考えると、それは単なる偶然によるとは思われないのだ。むしろ、このユニークな空間にいると、はじめからルールのボフムにこそふさわしい空間として、ここに立ち現われたかのように思えてくる。この辺りは、今も、大学の植物園とともに、産業都市ボフムの勤勉な市民たちが、学問と藝術にそれぞれの夢を託して、集い来たり、誇らかに散策する場所であることだろう。

たしかに、「大学には博物館がある。もちろん、西欧の話である。わが国の大学には、そういうものは、ほとんどない。不急不要なものと見なされているからであろう。……博物館に代表される興味のありよう、それが大切なのである。そこには不思議なものが、多数存在している。」（養老孟司氏、日本経済新聞、平成4年6月23日付夕刊、より）

写真（C）
〈ラオコーン〉復元群像と、1974、Jan J. Schoonhoven の作品。

写真（D）
今は亡き、イムダール教授（中央）の演習風景（Mönchengladbach 美術館にて、1983年7月5日、筆者撮影）。